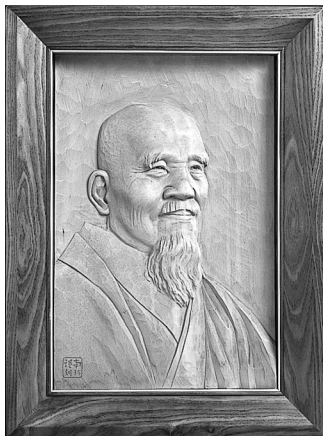
名塩良造伝

株式会社ナシオ創業者

名塩良造



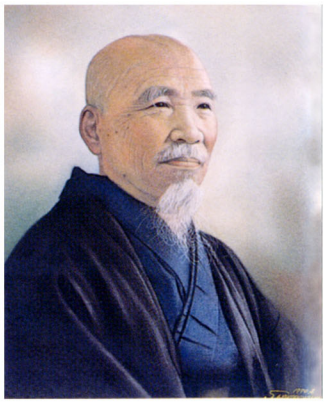
［本扉彫像］
松本菓子移出入組合から松本市長の感謝状と共に
寄贈された良造の肖像額（昭和35年）

北海学園北見大学設立10周年を記念し寄贈された茶室とその前庭に佇つ良造の句碑

良造の社会的・文化的な貢献を認められ数々の表彰を受ける

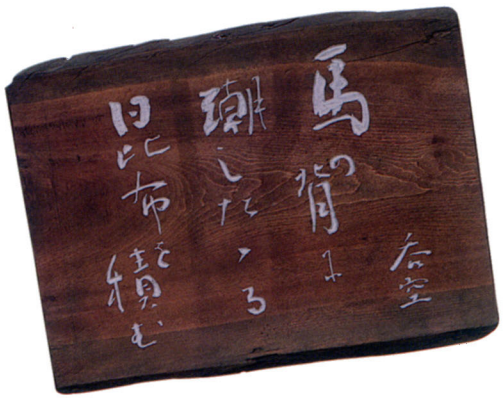
二代社長
名塩 小三郎

創業者 妻
名塩 セツ



株式会社ナシオ創業者・初代社長
名塩 良造

三代社長・現会長
名塩 良一郎



北見市立図書館に据えられている良造の胸像と俳句板

序

地の恩、人の恩、商いの恩

平成九年十一月十七日、都市銀行北海道拓殖銀行破綻のニュース、次いで、同月、山一証券の廃業は、北海道のみならず、日本の政治、経済、あらゆる分野を震撼させまして、日本の経済史に残る大激動の年でございました。

この時、私共は、二〇〇〇年対応の情報システムの完成と共に、首都圏新流通中心地、埼玉県南越谷の市街地に一〇八〇坪の土地を取得し、一七〇〇坪の自動処理倉庫付の関東本部の建設にかかり得た「運のよさ」は、只々、皆様方のお引き立てのお蔭と、心からの感謝の気持ちで一杯であります。

私も〝六五歳の人生〟ひと区切りの年ともなりましたので、新時代対応の為〝平　公夫〟を四代目の後継者といたしました。そして〝創業者〟名塩良造が、いくたびの苦難を乗り越え、勤倹、力行の人生の中から、たえず口にしておりました信用の大切さ《地の恩、人の恩、商いの恩》この精神を生かし、社業の発展と共に「おおやけに報いる努力」の伝統を残さんと願い発刊致しました。

〝創業88年の年〟に当たり、これまで蒙りました御厚意に深謝し、今後共、新役員に対して、私同様、ご愛顧、ご鞭撻をお願い申し上げ、御礼のご挨拶と致します。

平成十年七月三十日

株式会社ナシオ
取締役会長　名塩　良一郎

名塩良一郎
［**東京**］全国流通菓子卸協同組合理事長・IY〈イトーヨーカ堂〉グループ千羊会幹事
［**札幌**］情報サービス(株)ヘリオス取締役社長・学校法人北海学園評議員、同窓会副会長
［**北見**］北海学園北見大学協力会会長・浄土真宗本願寺派本覚寺総代

【目次】

序　地の恩、人の恩、商いの恩　名塩良一郎　七

名塩良造伝　一三

【第一章】鯨は川に住まず　一四

船場の商家に生まれる　一四
八歳で奉公へ　一五
樺太へ渡る　一六
酷寒の地の重労働　一六
野付牛駅前に降り立つ　一七
行商の日々　一八
留辺蘂橋のたもとの店　二〇
銀行の口座開設一番乗り　二二

セツと結婚する　二二
菓子商売が一番いい　二四

【第二章】
明日のために今日働く　二六
野付牛駅前に「名塩商店」開店　二六
家族をあげて奮闘する　二八
現金仕入れと製造元との直取引　二九
商人としての心意気　三〇
覚書帳に捺印してもらう　三一
業界紙への投稿　三二

【第三章】
戦前の黄金時代　三六
僧侶のような風貌　三六
勤倹力行により富貴　三八
親苦労、子楽、孫乞食　三九

名塩一統の仕入れ旅　四〇
四階建て店舗を新築　四二
キャラメル商戦　四四
金持ち番付で西の横綱に　四五

【第四章】
俳人呑空としての顔　四六

上海、青島を視察　四六
統制令により廃業へ　四七
図書館の建物を寄贈する　四八
仕入れ旅の途上で作句　五一

【第五章】
名塩復活への布石　五四

再興へ踏み出す　五四
社運をかけた仕入れ旅　五五

東京名塩会の結成　五六
病に倒れる　五七
死去　五八

俳人名塩呑空　六一

花野秀句集

鷹日和 ◆昭和元年～昭和20年　六二
有珠の名月 ◆昭和21年～昭和23年　六六
昆布積む ◆昭和24年～昭和25年　七一
夢つつむ船 ◆昭和26年～昭和29年　七四
鮎の奥美濃 ◆昭和28年～昭和29年　七六
湯女の化粧 ◆昭和30年～昭和31年　七九
大小の湖 ◆昭和32年～昭和33年　八一

名塩良造伝

【第一章】鯨は川に住まず

船場の商家に生まれる

名塩良造は、明治十六年三月一日に、大阪市船場淡路町で生まれた。父は幸三郎、母は作といい、良造はその次男だった。

幸三郎は船場で、紙の荷受け問屋を経営していた。幸三郎はもともと江州高島郡黒谷村の庄屋・河合の孫に当たるが、大阪市船場紙商の名塩佐助に奉公しているときに認められ、そこの娘であった作と結婚して、名塩家の婿養子となった。

名塩は摂津の北辺、武庫川の支流の一つ名塩川に沿う谷深い集落。江戸時代から「名塩紙」の産地として知られる。雁皮のみを使用して泥土を混ぜる、三椏紙と呼ばれる独特の製法で、全国に名声を博してきた。名塩家は名塩にその源を持ち、名塩紙専門の荷受け問屋として、現在の中央区南船場三丁目に店を張っており、良造が生まれたころには、京都・大阪を中心に手広く商いを営んでいた。

八歳で奉公へ

船場は豊臣秀吉が町屋として開発して以来の商業地。江戸時代に各種問屋が集中し、大阪経済の一中心地になっていた。明治十六年といえば、日本が近代国家として生まれ変わろうとしていた時期である。商工業界も「殖産興業」を旗印に、近代化へ向けて産みの苦しみを味わいつつあった。船場の商人たちもまた、生き残りをかけて果敢に戦っていたにちがいない。

父・幸三郎は、この激動期に三椏紙の相場を張って敗れ、良造が誕生して数年後に、店が倒産してしまったのである。一家は、京都の親戚を頼って移住した。貧しい生活のなかで、母・作が病に倒れ、養生の甲斐もなく、良造が八歳の時に亡くなった。幼い良造と兄は、大人に混じって母の棺を担い、悲しみにくれながら土葬した。

良造はすでに小学校に上がっていたが、一年生を修了した時点で、学業を断念せざるを得なかった。家が貧しかったせいもあるが、幸三郎が商家の子は奉公に出した方がいいと考えたためでもあったろう。当時の商家の子弟は、奉公に出るのが普通だった。奉公先は、父の恩人で古着質屋を営んでいる山上屋清兵衛の店だった。良造は一七歳まで、この店で奉公した。

向学心の強かった良造にとって、一年で学業を断念するのは、さぞつらかったにちがいない。学校に行かなかったとはいえ、良造は貪るような知識欲と好奇心で、さまざまなことを学んでいった。教材となったのは、新聞と雑誌だった。朝早くから晩まで働かされる丁稚の身近にある活字といえば、商品をくるむのに使われる新聞や雑誌の切れ端しかない。良造は折りにつけ、膝の上でしきりに指を動かし、その空間に何かを書き付けていたという。おそらく、そうして字を覚えたものを、確認していたのだろう。後年の筆力を見ると、小学校一年間の学歴しかないとは信じられないが、良造は独学で字を学び、自分の頭で考え、自らを厳しく鍛えていったのである。

樺太へ渡る

良造が一七歳になったころ、父は紙問屋から煙草問屋を転進して、経営を軌道に乗せていた。住まいも京都三条西洞院の角屋敷になっていた。幸三郎は店を手伝わせるため、良造を呼び戻した。その二年後、幸三郎は金沢に支店を出すことにし、良造をその責任者として送り出した。

良造ははじめて異郷の地を踏み、そこで仕事に精を出した。そして、二三歳の時に結婚し、その翌年、子どもが生まれた。後に二代目となる小三郎である。しかし、まだ悲運は終わらない。子どもが生まれて一年もしないうちに、妻が病で倒れ、この世を去ったのである。良造は悲しみを忘れるためにも、新天地に向かうことを決意していた。

当時、わが国は日清戦争に続いて日露戦争に勝利し、国威が大いに発揚していた。朝鮮に権益を確保し、樺太に領土を獲得したことで、海外へ雄飛するという野望を多くの青年が抱いていた。二五歳の良造とて、その例外ではない。いや、誰にも負けないくらい、成功への野心が心のなかに渦巻いていた。

明治四十一年、良造は意を決し、小三郎を父に預けて、単身、富山県の伏木港から船に乗った。目的地は、移住者が続々と詰めかけ、景気の良さで知られていた樺太である。船は小樽に停泊後、樺太に向かった。しかし、そこで待っていたのは、思いも寄らない過酷な生活だった。

酷寒の地の重労働

良造が乗った「高松丸」は、樺太の大泊港に到着した。大泊はいまのコルサコフで、日本領当時は島内で最大の都市だった。樺太の玄関口であり、後にこと稚内との間に、稚泊航路も開設される。

この新天地に、身寄りや知り合いは一人もいない。所持金も十分ではない。だが、良造は意気軒昂だった。新しい開拓地に移住者が続々と詰めかけているのに、商店はまだ少ない。行商で物を売って歩けば、いつか自分の店を持てるほどの利益を上げられるだろうと確信していた。

良造は、豊原で行商を始めた。豊原はいまのサハリン州都ユジノサハリンスクで、このころから交通の要地として栄えていた。樺太庁が置かれていたのも、この都市である。良造はまず官舎などを回って、御用聞きをすることにした。御用籠に米や味噌を入れて背負い、売り歩く日々。重い米俵を背負って山坂を上り下りするのは、頑健な体を持つ良造にとっても重労働だった。冬になると、ソリに荷を積んで行商する。夏は過ごしやすいとはいえ、北の島の冬の厳しさは良造の想像を超えた。吹雪になると、道を失い、雪の谷に転落することもあった。

商売は思ったような成果を上げられなかった。厳しい最北に地に生きる生活者たちの気性は荒い。関西で親しんできた商慣習は、ここでは通じなかったということもあるかもしれない。

おそらく資金を使い果たしたためであろう、良造は土工となって働きはじめた。これは過酷な労働を強いられる、タコ部屋のようなものだった。無理に無理を重ねて働いた結果、腸チフスで倒れてしまった。腸チフスは伝染病で、高熱と激しい頭痛を伴う。衰弱しきった良造は、大泊に戻り、越年帳場の働き口を見つけて、一冬をしのいだ。もう、樺太を離れるしかない。春になるのを待ち、良造は北海道行きの船に乗った。樺太での二年間、それは苦い思い出ばかりでしかなかった。

野付牛駅前に降り立つ

明治四十二年、命からがら樺太から帰った良造は、釧路に落ち着いた。福富甚吉のニシン漁場で、下帳場を務めたのである。月給は五円。二年目からは七円五〇銭。当時の大学出の給料の半分以下だったが、不満は言えなかった。

釧路は押し寄せるニシンの大群で景気が良かったが、明治四十三年は大不漁となった。良造はそれを機会に職を辞し、新しい土地へ向かうことにした。良造がやりたかったのは商売で、勤め人になることではない。懐には二年間で貯めた九六円が入っている。九六円を二四カ月で貯めたとすれば、一月に四円貯めたことになる。節約に節約を重ねたのだろう。良造はこれを元手に、新しい商売を始めるつもりだった。

良造は建設列車（現在の池北線）の木材の上で信玄袋一つを頼りに、野付牛に向かった。何一つあてがあるわけではなかったが、ハッカと木材で好景気に沸く野付牛には、強く心を惹くものがあった。

北見の古い名である野付牛は、アイヌ語でヌプンケシ「野の果て」を意味する。明治三十年に屯田兵二個中隊や土佐の北光社移民団が開拓に入るまで、ここは文字通りほとんど人のいない不毛の地だった。しかし、常呂川と無加川の合流点に広がる河岸段丘なので、もともと土地は肥えていた。周辺の山々にはゆたかな木材資源がある。道央とオホーツクを結ぶ交通の要地として、地理的な条件も悪くない。そして、明治三十五年に導入されたハッカは、その将来性が高く買われ、毎年作付け面積を伸ばしていた。これだけの条件が揃えば、開拓者たちがどっと押し寄せたのも無理はない。明治四十四年九月の網走線陸別～野付牛間の鉄道の開通を待ちきれず、開拓者たちは資材を運ぶための建設列車に鈴なりになって、続々と到着した。

明治四十四年夏。良造はこの建設列車に乗って、まだ完成していない野付牛駅に降り立った。駅前はだだっ広いだけだが、あちこちで槌音が高らかに響き、街は活気に満ちていた。二八歳の良造は、この未知の土地を眺め回し、必ずや捲土重来を果たすことを自らに誓った。

行商の日々

良造はまず行商から始めた。開拓に取り組んでいる地域を中心に、野付牛から留辺蘂の温根

鉄道建設列車の到着（明治40年10月）
〈北網圏北見文化センター提供〉

湯、北見富士のふところまで足を伸ばした。扱った商品は、菓子、塩干魚、果物、荒物など、食料品と雑貨である。商品は馬車を借りて、網走まで行って調達した。当時はまだ、踏み分け道程度にしか道路が整備されていない。途中で橋のない所は、馬を川に入れて必死で対岸まで渡った。

重い行商の荷は肩に食い込んだが、頑健な良造はそれを苦にせず歩き続けた。もったいないので、商人宿には泊まらない。もっぱら農家や造材所に泊めてもらった。商売熱心なことと、旺盛なサービス精神で、良造はどこへ行っても歓迎され、売り上げは順調に伸びた。

頑張ったかいがあり、早くもその年の暮れには、店舗らしきものを建てることができた。間口三間、奥行き二間の丸太小屋だったが、とにもかくにもこれが良造の建てた最初の家だった。

行商をしていたころの、凍てつくようなある冬の夜。歩き続けたために良造の足どりは重く、体は寒さでふるえていた。一刻も早く体を休めたいが、宿を取っていては、店を出す資金が溜まらない。どこかに寝られる場所はないものかと探していた良造は、一軒の運送店の荷置場に恰好の場所を見つけた。荷造り用のワラ製品がたくさんあり、それを体に巻けば凍えずにすむ。良造は背の荷を降ろすと、ほっとしてワラのなかに潜り込んだ。眠りはすぐにやってきた。

それから数時間経ったころ、良造は誰かが自分に声をかけているのに気づいた。ああ、追い出されるのか。これから長い夜をどうやって過ごそうかと思いながら目を開けると、優しそうな女の人の顔があった。

「こんなところで寝ていたら、風邪を引いてしまいます。家に床を取りましたから、どうぞ横になって下さい」という。この家に養女に来ている人だった。一度は遠慮した良造だったが、布団の上に寝られるのはなにより有り難く、家に上がらせてもらった。床に入ってから、良造は感激して泣いた。布団の暖かさが嬉しかったのはもちろんだが、人の心の暖かさが身にしみたのだ。

良造はその時、決心した。「わずかな宿泊料を節約したために、ご迷惑をかけました。しかし、

見ていて下さい。今は一荷しかない貧乏商人ですが、成功してたくさん荷を出し入れして、このお店に荷を一手に扱っていただきます。そうしてこの一宿のご恩に必ず報います」と。声には出さなかったが、心のなかで固く誓ったのである。

良造はその後、この誓いの通り商売を成功させ、名塩商店の入出荷はすべてこの上村運送店に委ねた。他の業者には一品も扱わせることはなかった。

また、年賀には必ず挨拶に行き、名塩家のお祝いの席では店主の上村宗太郎を正客として招き、必ず正座に置いた。良造には一度恩義を受けると決してそれを忘れず、それに報いるという律儀さがあった。

留辺蘂橋のたもとの店

翌年、良造は無加川の留辺蘂橋のたもとに、いよいよ単独の店を出した。一〇坪ほどの板張り土台付きの粗末な店構えとはいえ、とうとう自分の店を持てたのである。

良造は心配しているだろう父を安心させるため、北海道で店舗を持ったことを葉書に書いて送った。その表には、「名塩商店」という判も押した。父の幸三郎は、これを見て、良造が立派な店舗を構え、手広く商売しているものと見て、大いに喜んだ。そして、さっそく京都から、孫の小三郎の手を引いて、移って来た。

しかし、開拓途上の留辺蘂の街は、京都から見ればあまりにも荒らくれた土地だった。良造の店はといえば、ちっぽけで安普請。店にあるものを見ると、菓子、果物のほか、小エビの乾燥したもの、煮干し、塩カマスなどで、軒先には土間に届きそうなほどの大きな魚が吊ってある。期待に胸をふくらませていただけに、幸三郎の失望も大きかっただろう。

留辺蘂橋のたもとには、小さな一杯飲み屋や雑貨屋が点在するだけで、良造の店の周りも人家がまばらだった。その向こうには荒涼とした風景が広がっている。橋を渡ると留辺蘂の市街

だが、そことて料理屋がいくつかあるだけの淋しい街並みだった。

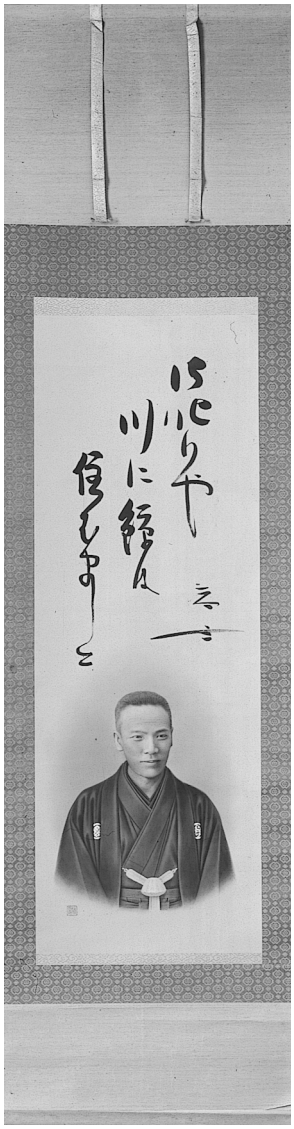
目の前を、犬の皮で作った胴着を身につけ、赤いヤッケを着た造材夫が、丸太を満載したソリを馬に曳かせ、掛け声勇ましく通り過ぎてゆく。

それを見ながら、幸三郎は良造に大きな声で言った。

「おまえは、とんでもないところに店を開いたものだな。こんな所は人間の住むところじゃない。鯨は川に住まずというだろ。こんなところで満足しているようじゃ、おまえは小さな魚でしかない」

得意になって父を呼んだだけに、良造にはこの言葉がこたえた。しかし一方で、いまに北海道で一、二を争う商人になることも心に誓っていた。常に志を高く持つこと、現状に満足してはいけないことを、「鯨は川に住まず」という言葉はよく表している。後年、良造自身がこの言葉をよく口にすることになる。

幸三郎は厳しく良造を叱咤激励するのが常だったが、一面で父親らしい優しさを見せることもあった。良造が冬の寒い朝、遠方に出張するときは、夜明け前に起きて握り飯を作って持たせたという。



[名塩家の家宝]
「御叱りや川に鯨は住むまじと」呑空
幸三郎の「川に鯨は住まんぞ」といういましめに、良造は後にこの言葉を俳句にし、幸三郎の肖像を入れて座右の銘として大切にしていた。

銀行の口座開設一番乗り

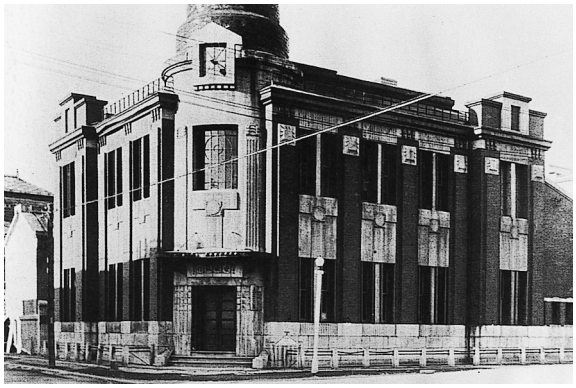
父はまた良造に、「商人は銀行取り引きをうまくしないと大成しない」と教えた。商売の帰趨は、いかに上手に銀行を利用するかによって決まる。このことを、近江商人として大阪、京都で大きな商いをしてきた父は、骨身にしみて知っていた。

大正二年、根室銀行の野付牛支店が開設された。その日の早朝、良造は馬に乗り、留辺蘂から野付牛まで六里の道を走らせた。息せき切って銀行に着いたときには、まだ門が開いておらず、その前には誰もいない。門が開くやいなや、良造は銀行に一番乗りし、第一号の当座を開くことができた。その通帳を勇んで家に持ち帰ると、父はそれを神棚に上げ、良造の前途に幸多かれと祈願した。

口座開設に一番乗りしたことで、良造は初代支店長の本間弥吉と深い親交を結ぶことになる。その関係は、根室銀行が安田銀行に合併された後も、長く続き、商売を発展させる基礎となった。律儀な良造は、年賀に挨拶に行く第一号は、安田銀行の支店長宅と決めていた。また、名塩家の祝宴には必ず支店長を正客として招くというしきたりもできた。

セツと結婚する

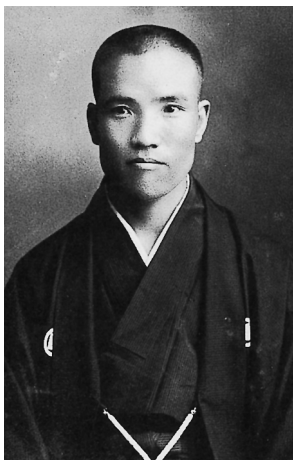
良造の年賀の挨拶の一番目は野付牛の本間弥吉、二番目は上村宗太郎。それから留辺蘂に帰って、伊藤清次郎の家へ挨拶に行った。この伊藤清次郎という人は、良造の人柄と仕事ぶりに惚れ、会う人ごとに「名塩は菰にくるんだダイヤモンドだ」と吹聴するほどだった。何事につけ良造の良き相談相手となり、わが子のように引き立ててくれた。良造もまた、「伊藤のお父さん」と呼び、慕った。



安田銀行（昭和10年）
〈北網圏北見文化センター提供〉

良造に結婚相手を決めたのも、清次郎である。大正三年五月に良造は、徳島から移住して来た棚橋セツと結婚した。良造三一歳、セツ二一歳。これから長い間、セツは良造を助けて、店を盛り上げていくことになる。良造はよい妻を授けてくれたことに、いつも感謝していた。

結婚したころ、良造は留辺蘂橋のたもとから、留辺蘂駅前へ店を移していた。山又中平金物店の隣を借り受けたもので、前よりは小ぎれいな店舗となった。店売りのほかに農家、飯場をめぐって行商もしたが、それに加えて佐呂間の奥地で卸売りも行うようになった。



良造・セツと結婚
（大正3年5月）

創立当時の店舗
（左から1人目・名塩良造、5人目セツ）

大正三年七月、父の幸三郎が京都で病のため亡くなった。良造は父の仏前で商人として大成することを誓い、新しい道へ踏み出すことを考えていた。

菓子商売が一番いい

小三郎はすでに小学校二年生になっていた。その小三郎に良造はよく商売について話して聞かせたという。自分の商売として何が一番いいのか、長年の経験の中から真剣に考え、子どもに語りかけることで考えをまとめていたのだろう。

「商売といっても、八百屋とか、魚屋だとか、酒屋ってものはしてはいけない。魚はいくらこれで売ろうと思っても、買い手がなければ鮮度が落ち、腐ってしまうものだ。だから、金払いのよくないような所でも、仕方なく持っていって、まあまあと言いながら置いてきてしまう。集金に行っても踏み倒されることが多いんだ。野菜や果物だって、魚と同じで、腐ってはしょうがないので、値段が合わなくても売ってしまう。本当に腐ってしまえば、裏の川に捨てなければならない。自分の意志ではなく、心ならずもそうする羽目になる。そういうのはいかん。酒屋は、亭主は喜んで飲んでくれても、奥さんは酔っぱらうのを嫌がって財布の紐を締めるから、支払いが滞りがちになる。だから、駄目だ」

これらの言葉は、実際に開拓地や飯場を回っていて、何度もそういう体験をしたから出て来たのだろう。

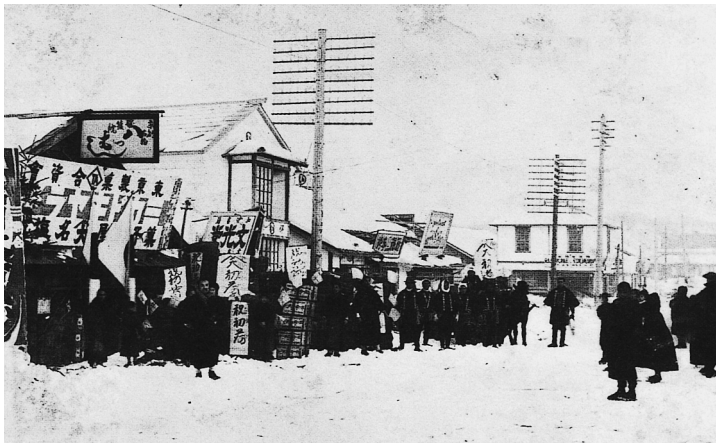
「じゃあ、何の商売がいいの？」と聞く小三郎に、良造はお菓子屋だと答えた。

「お菓子は、魚や野菜と違って、ある程度の保存に耐えられる。酒と違って、家族みんなが喜んで食べるものだから、支払いも割合いい。だから、菓子が一番いい商売になるだろう」

商売は投機的ではなく、何より安定していなければならない。また、客がこころよく金を支払ってくれるものでなければならない。そして、心ならずも自分の意志を曲げるような商売を

してはいけない。この良造の商売に対する姿勢から、菓子商への道は自然に開かれていったのだった。

北見駅前風景（大正5年）



初荷風景（大正5年）

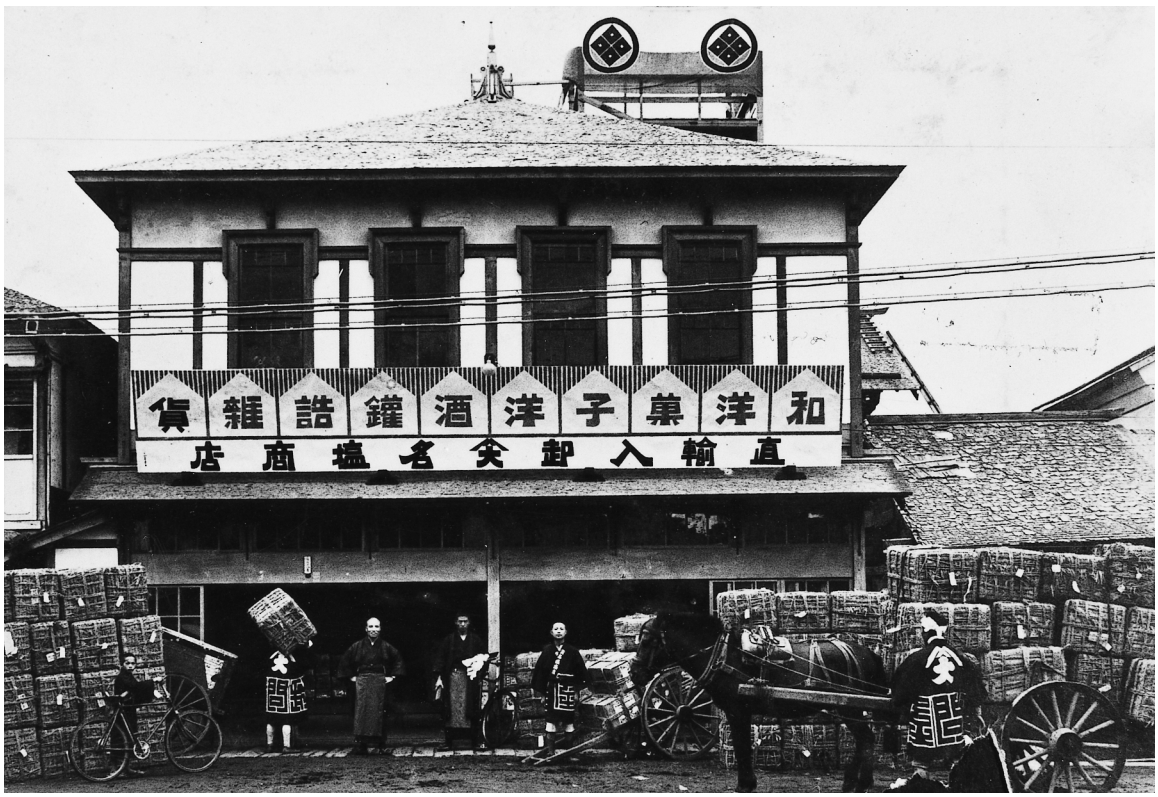
【第二章】明日のために今日働く

野付牛駅前に「名塩商店」開店

大正三年十一月、良造は野付牛の駅前に待望の店を出した。未完成の野付牛の駅に降り立って、商売を成功させることを決意してから、四年の歳月が経っていた。その間に、良造はさまざまな体験をし、人脈を作り、商人としての精進を重ねてきた。商人として一回り大きくなって、野付牛に帰ってきたのである。

この年の五月、野付牛村一条三丁目から出火し、市街の大半が焼失した。このとき、駅前の絶好の位置に空き家ができた。かねて中心街への進出をもくろんでいたた良造は、それを見て、「この場所だ！」と直感した。

店舗は、間口八間奥行き六間。はじめは店舗の半分を香川新聞店が使っていたが、後に移転したので、面積は留辺蘂時代の五倍の本格的な店舗となった。大きな看板には、「菓子問屋・名塩商店」書かれている。ここに今日のナシオに連なる本格的な事業が始まったと言っていい。



◎モットー

私の店は堅くこの格言を守つて居り升
「供物を免るゝは危地を免るゝなり」
それと私の店は非募債主義で血と涙の辛ひ現金仕入ですから
それと私の商品は全部が産地直輸入の製造人と温く親交して居り升
利は充にあり眞理は其下にあり優良の品と格安の品とは私の店の特
色と信じます……

和洋菓子
洋酒燒酎
鑵詰雜貨
卸問屋

金名鹽良造商店

北見國野村牛町停車場前
電話七十八番
電信略號ナンヌ（ナシ）

取引銀行
東京　第三銀行
野村牛　根室銀行支店

振替貯金口座
小樽八百十八番

専屬荷扱所
上村運送店

創立当時の新聞広告（大正時代）

当時、野付牛の駅前には、良造の店のほか、雑貨店、印判店、床屋、精肉店、旅館などが軒を並べ、小さいながらも繁華な市街が形成されていた。

家族をあげて奮闘する

名塩商店は開店したが、まだ資本も商品も十分にはない。広い店内をにぎやかに見せるために、空き箱を重ねたこともあった。店の働き手は、良造夫婦と一三歳の小僧、それに小学生の小三郎の四人だった。もし、この店が失敗すれば、一家は路頭に迷うことになる。結婚したいまは、いままでよりも責任が重い。良造とセツは、朝早くから夜遅くまで、死にものぐるいで働いた。文字通り、背水の陣だったと言っていい。

良造は仕入れ先と得意先の開拓に力を入れた。朝起きると、戸を外し、荷をいったん外へ出す。それから荷ほどきをして、送り先ごとに梱包し、荷札を貼り、伝票を切る。それを小僧が荷車に乗せて、駅まで運んだ。

菓子の製造元は本州が多く、荷は貨物船で運ばれてくる。時化があったりすると荷が傷んでしまい、そのままでは得意先に届けられない。そんな荷は、釘を打ち、板切れで補強した。夜寝るときは、ふたたび荷を店の中へ取り込む。にわか雨や洪水の時などは、荷を守るためにてんやわんやの騒ぎとなった

二一歳のセツは、新婚の甘い気分に浸っている余裕はまったくなかった。主に集金を担当し、毎日、野付牛から湧別、遠軽方面まで行く。資金の余裕がないので、一刻も早く集金しなければならない。荷が小売店に着くか着かないかのうちに訪れるものだから、先方は当然、支払いを渋る。セツは「今日の終列車で帰らなければなりません。〇〇円を集金して帰らないと、店は大変困るんです」と、涙ながらに頼み込み、必ずいくばくかの集金をして店に帰った。はじめのうちは、「おまえの店くらい、集金の厳しい店はない」と文句を言っていた小売店の店主た

ちも、雨が降っても吹雪いても熱心に集金して回るセツの姿に同情し、こころよく支払いをしてくれるようになった。

セツが集めた金はすぐに、銀行、製造元、運送店などの支払いに当てられた。商売にとって信用ほど大事なものはないと良造は考えていたから、決して取引先への支払いを遅らせることはなかった。小三郎も一人前の働き手として扱われた。良造とセツは夜遅くまで働いているので、なかなか起きられない。それで小三郎が飯を炊き、味噌汁を作り、一人で食事をすましてから学校へ行った。帰って来ると、薪割り、ランプ掃除、荷ほどきなどの仕事が待っている。商品を配達したり、請求書を届けることもあり、遊んでいる暇はなかった。

創業当初は、狭い敷地の大半を店舗に使ったので、住居は狭く、寝起きも大変だった。冬は炉にこたつ櫓をかけ、そこに夜具を四方から敷いて、掛け布団をかけて寝た。こうした創業時代の家族をあげての奮闘から、名塩商店の基盤が着実に形成されていったのである。

現金仕入れと製造元との直取引

創業当時、良造が出した新聞広告には、「◎モットー」というタイトルに続けて次のように書かれている。

私の店は堅くこの格言を守っております。

「債務を免るるは危地を免るるなり」

それで私の店は非債務主義で血と涙の辛い現金仕入れで
すから
それと私の商品は全部が産地直輸入の製造人と温かく握
手しております
利は元にあり真理は足下にあり優良の品と格安の品とは

私の店の特色と信じます……

野付牛駅前に直輸入卸の看板を掲げて以来、良造は「現金仕入れ」による「製造元との直取引」を商売の基本原則とした。複雑な流通機構を省いて価格を抑えるという現代的な商法を、この時代に早くも取り入れたのである。

当初はもっぱら旭川、小樽、函館など道内各都市を仕入れのために回ったが、道内は製造元自体の数が少ない上に、品質もあまり良くない。それで、良造は、東京、大阪、名古屋へと足を伸ばしていった。

菓子問屋としてほとんど名が知られておらず、しかも資金の乏しい創業当初の時期に、全国の有力な製造元と取引関係を築いていくのは、並大抵の苦労ではなかったろう。良造は「山伏以上のほら貝を吹き立てて」と、この頃のことを表現しているが、やはり相手から信頼されるだけの人間的な魅力があったからにちがいない。また、安田銀行の信用力の後ろ盾に負うところも大きかった。良造はこれはという製造元に狙いを定めると、工場の生産能力に合ったまとまった量を注文し、納期の厳守と特別割引を要請して、粘り強く交渉するのが常だった。

商人としての心意気

小樽で「ボーロ」(ビスケットの一種)という菓子を作っていた堺屋製菓所の永野全四郎社長の話から、良造の商売の仕方を再現してみよう。

「永野さん、百匁建て一四銭五厘を、一四銭きっかりにしてくれませんか」

「これは最底値だから、負けられません」

「そこをなんとか」

「できません」

両者はこうして、双方譲らないまま、三時間粘り合う。ついに良造の方が根負けして、一四銭五厘で、みかん函八個合わせ、菰包み一二〇梱包の注文を出した。当時の問屋は、札幌でも、旭川でも、二〇～三〇梱包の注文がせいぜいだったから、良造は大量注文をしたことになる。

「永野さん、一週間くらいで出荷すると約束して下さい。私はこれから東京に仕入れに行くから、代金は帰りに払います。約束を守ってくれたかどうかは、運送店の荷受証を証拠にしてもらいます」

良造は厳しい顔で言い残して、東京へ発っていった。永野も強情さでは、良造に負けていない。夜も寝ずに工場をフル回転させ、なんとか期日までに生産して発送した。

二週間ほどして東京から帰った良造は、荷物を送ったかどうか尋ねた。永野が荷受証を見せると、良造は大声で笑い出した。

「私も強情者だが、君もずいぶん強情だなあ」

これ以降、二人の心が通じ合い、取り引きは長く続いた。良造は取引相手に、いつも闇雲に値引きを迫ったわけではない。相手に商人としての誠実さや心意気を感じると、商売の域をこえて、人間的なつきあいを深めていった。

覚書帳に捺印してもらう

良造は本州の菓子製造元へ行くと、先手を打って次のような条件を提示した。

・今後一年間、毎日一時間だけ夜業を延ばしてもらいたい。その一時間分の製品はすべて当方が引き受ける。

・手金は当地の安田銀行支店の当座小切手で、残金は荷為替で受け取る荷物と引き替えに支払う。だから、絶対に迷惑をかけることはない。

・支払いの安全性と確実さを保証するのだから、原料、工賃などの諸経費を引いた利益は、

折半にしてもらいたい。また、北北海道の新しい未知の市場に進出するのだから、商品の宣伝費は負担していただきたい。それでもあなたは、十分な利益を得ることができる。

良造は銀行の信用力を最大に利用して、確実な支払いを保証する代わりに、相手には利益をぎりぎりまで圧縮することを要求している。それでも取引先の主人は、「安田銀行の各支店に当座を開くほどだから、相当の信用と資力を持つ男にちがいない」と確信して、取引はたいてい良造の意図する方向で成立した。

また良造は、取引に伴う事故を未然に防ぐため、和綴じの覚書帳をいつも腰に付けて持ち歩いていた。取引のたびに、重要な経緯をそれに筆で細大漏らさず記入した。そして、契約が終わると、相手の前で復唱し、捺印してもらった。互いの言い分が食い違ったとき、この覚書帳がどんなに役に立ったか知れない。商人として互いに約束を守り合うことを、良造は何よりも重んじた。

業界紙への投稿

良造は近江商人の血を引く伝統的な商人といっていいが、意外に近代的な発想も持っていた。今日の言葉で言えば、コマーシャルやパブリシティがいかに大切かを知っていたのである。野付牛に店を出したころ、良造は次のような当時としては斬新な宣伝方法を考え出した。

・片側が白、片側が赤という奇抜な洋服を着た宣伝マンに、幟を担がせて市街を歩かせた。
・色街の女性を対象に「美人投票」を企画した。
・菓子を買うと、映画館の入場料が割引や無料になる仕組みを企画した。
・地元新聞社とタイアップして広告宣伝方法を改善した。
・全国の製造元に自分の名を売るため、業界新聞へ積極的に投稿した。

さてここで、良造が業界新聞に投稿したのがどんな内容だったのか、見てみよう。このころの代表的なメーカーといえば森永製菓だったが、良造はその経営の仕方を批判する原稿を書いて、各業界新聞社に送ったのである。業界新聞にとって、森永は最大のスポンサーだったから、そんな原稿を簡単に掲載するわけがない。しかし、「帝国菓子飴新聞」だけは、良造の投稿が一部の商店の意見を正しく反映しているとして、掲載に踏み切った。これが縁となって、良造は同紙の投稿欄を毎号、にぎわすようになった。題材は、菓子製造業界のこと、製造元の主人の人となり、四季折々の風物など、幅広い。良造は鋭い観察眼を持つエッセイストでもあった。

良造の論議の対象は、菓子業界や産業にたずさわる者のあり方など、広範な範囲に及んだ。なかには、「不親切で研究心もなく、時流の流れを見るに鈍く、約束を違え、ただただ保守的に盲人が落とし物を探すようなサマをしている」と、関西のメーカーを痛烈に批判したものもある。最初のうちは、読者から「名塩の大法螺」くらいにしか受け取られなかったが、しだいにその言説が注目され、各地の製造元は「名塩とはどんな男か」と、その訪問を心待ちにするようになった。「名塩」という名の知名度を高めようという作戦は見事に成功したと言っていい。また良造にとって、新聞への投稿は、自らの商売の理念を世間に広めていく上で、重要な媒体となった。

叩けよ扉〈その1〉

関西菓子業者に呈す

私から見ると関西業者は、「牛に曳かれて善光寺詣り」の感がある。常に関東より鞭うたれて、ようやくにして動くと謂う状態で、珠盤にのみ膠着をして時の流れから落

伍をしている。

容器に於いて然り、関東ではつとに小函が専らで、目貼り中敷紙、筵縄がけと、その堅牢な完備した親切な荷造りが実行されている。中京も直ちに之にならって歓迎されている。殊に中京は震災後は、中部、北越、東北、羽越等の諸線に股がり、決河の勢いで進出、発展しつつある。

然るに大阪は如何なるか。今に尚、石油箱、ビール箱等で真にお粗末千万で、抜き荷、破損もおかまいなしで加えて発送期日においては、取引の命とでも云うべき約束履行の出来ない哀れな姿である。

従って、当てにならない取引先でも、問い合せ式で値段さえ安ければと、こんな気まぐれな取引で相互間が疎遠感情にある。要するに遠大な抱負がなく、誠意と勉強のない菓業者が恰も盲人が落しものをした格好が大阪の業者である。

東京式の荷造りは出来ません。小函はありません。手が廻りません。時季扱ひの発送は出来ませんと一事が万事といふ外ない個人工場に於いて雑然として整頓なく、不衛生極まり、会社工場にありてもおそらく五十歩百歩の感覚である。

之が日本最古の商工都市に存在するとは驚嘆あるのみである。通信連絡又然りで、端書手紙に依って照会請求する場合はいつも五対一の割合で薩摩の飛脚で返信がない。私が羽越線の開通後二ヶ月後に関西を訪れた処、業界の大半はその開通を知らないでいるのに吃驚した。新幹線開通によって之を利用して新しき発展に資さんとする意欲の欠如また甚だしいといわなければならない。商工会議所、同業組合の諸機関の中に営業する業界者をうたがう所謂である。

亦憶ふに、組合費、広告費、機関紙は、百姓の肥料である。研究も向上も発展も改善もない関西業界の敢て扉を叩く所謂である。

（大正13年投稿より）

良造の投稿記事
（帝国菓子飴新聞・大正12年12月25日）

奇しき光りの旅

第一信　名嶺吞空生

何故に吾が國體がイヤなのか此の一系の皇室を家と尊戴しての御音信の一文を草して場の期に結び付け放ちました

恭悲さは、こうした機會に醸酵し、薄氷を踏むの大器を感激するものである善哉々々

高はしから電車で黒江町へ走つた

鹿が翼轉手の邪魔げだと小言を云ふんぐ癖に隣つて降車しツオ横町の考に伯父の墓所をと志したが土地不案内で迷ひに迷ひ亦た電車に乗つて一時間餘を徒じて漸く黒江町に行き付き遠西寺の門を潜る

私は御墓よりも祖師堂へと詣りまして柔和が佛前にひれ伏して居るそれが どうも伯母らしい、伯母さんでないのと聲掛けると良造さんかアノ〜そこの奇遇に伯母は熱涙を流して

佛壇の御明り合せで不思議ですね今御寺僧が不在だとて仕方なしに歸りまして

さんと五歳になる嬢男久雄君と一羽の鳩を抱へて来た、お父さんは

ちらと思つて居た處だつた、勿体ない牛町に一大製糖工場の設置されんとする、更に第二壮工場の設置されんとして勃然たり

此の結果は大日精糖、明治精糖等の大資本が勃然として拔に大々的の抗運動を企てられ横溢より發着蹶起の鐵道甲片の登行されしものに對しては運賃は本社自辨となして無賃千里を走り來りて京阪糖相場と同一價格と本道客扱の製菓業者が供給受得らるゝのである

此の結果は奈何の反響を齎らしめたのか

「大菓命の巨彈は投せられ

粗糖の値開きの爲めに奈何に脅威されて居つたものか奴隷開放にも似た一大恩寵に浴し得て京阪菓業者と同一の待遇を受け對等に競爭し拮抗する一大慶事の勃發し

菓界の一大革命

名嶺吞空生

國家が陸海軍に一大整理の巨斧を加へ所謂「軍縮」なるものは冗費を省除し一を以つて拾に價ひする考察の下に別ち九なる利潤を生み出而して其の賞讃を平和の一戦線にたる産業大戦に參加して今日の形成の一翼として參加し「飛躍優勝」等國より内容の一等國にて

糖業の勃興と

【第三章】戦前の黄金時代

僧侶のような風貌

良造は後日、自分が歩んできた商売の道を振り返って、こう語っている。

「〈信用は資本なり〉の商人訓は、金言です。手形は銀行が振って下さる。荷物は引換証のものを上村氏がどんどん運んで下さる。商品は内地の一流品ばかり、北見一国の人気が私の店に集まった感があった。この信用の母たるものは、私の父より植え付けられた〈一心一向〉という真宗の信仰の力と思います」

また、「帝国菓子飴新聞」の社長への手紙の中で、

「森永が大を成しえたのは、太一郎翁のキリスト教を信じる志が高かったからである。また、古谷辰四郎翁が北海道の慈父と呼ばれるのも、みずから洗礼を受けるとともに、絶えず育英事業に意を注いできた余徳である」と、書いている。

これらからうかがい知れるように、良造の商いの根底には、敬虔な宗教心があった。すなわ

野付牛町から北見市へ
（市政施行・昭和17年）
〈北網圏北見文化センター提供〉

ち、人間は独力でこの世に生きているのではない、人様の力や神仏の絶対的な力があって、この世にある。商売もそれと同様である。自己一人の力は微々たるものであり、数多くの人の支えがなければ成り立っていかない。自分を支えてくれる人びとに心から感謝し、これに報いる報恩生活を送ることこそが商売の道であり、人生の目的であるとする絶対他力を信じる思想である。良造にとって、徹底した合理主義による商売と、敬虔に宗教に帰依することは何ら矛盾しなかった。

岐阜市みりん焼き本舗社長の小中一郎は、良造と初めて会ったときのことを忘れがたい思い出としていた。

良造は白い髭を長く垂らして、みりん焼き本舗に現れた。小中にはとても菓子問屋の主人とは思えなかった。挨拶が終わるやいなや、良造は「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱えはじめた。呆気にとられたが、その声を聞いていると、不思議に心が落ち着いてくる。それから、見本のおかきを見せて商談となったが、十分ほどで話はまとまった。すると、良造はいきなり「ワッハハハー」と大笑いを始めた。あまりに磊落な様子なので、小中もいっしょに意味もなく笑い出していた。それから、良造は小中の両親と会い、互いに「南無阿弥陀仏」と唱和した。小中の家は金沢の出だということで話がはずみ、一時間も経つと昔からの友人のような話しぶりになっていた。

良造は「小中さん、今日は金儲けをさせていただくつもりで伺ったのに、近い親戚ができました。ありがとうございました」と挨拶して、去って行った。それから良造は本州に仕入れに行くたびに、この家に泊まるようになる。良造はなにかの因縁で一度つきあった人とはとことんつきあい、また相手にもつきあわせるという傾向が強かった。

良造は、仕事の相手先へ行くと、すぐに仏前に行って手を合わせ、読経するのが常だった。宗教に裏打ちされた真心のつきあいが、会う人すべてに深い印象を与え、相手の心を動かした。良造に会った多くの人びとは、「初対面のときは、とても問屋の主人には思えなかった。その風

貌、挙措はまるで僧侶のようであった」と、伝えている。

勤倹力行により富貴へ

「貧困にくだる者、昨日のために今日働く、富貴にあがる者、明日のために今日働く。貧富の差この一日に明らかなり。今日に富貴の分岐あらば、その今日に善処すべく務めざるべからず」

これは良造がよく口にした、二宮尊徳の言葉である。良造は身分不相応な贅沢をもっとも忌み嫌い、人に対しても常に徹底した節約の精神をもって貯蓄に励むよう奨励した。製造元を訪問するときは必ず便所を借り、そこまで歩く間に工場の様子を細かく観察した。そして、無駄や贅沢を見つけると、憎まれることを恐れず堂々と直言した。

「設備を拡張すれば儲かり、広告さえすれば需要が増大すると安易な考え方をしておれば、そんな経営者は早晩破産するにちがいない」と公言するのが常だった。

また、相手の人間をゆっくり観察しながら、きわめて堅実な商いを行った。貸し売りについても、店主の人間をよく見抜き、自分の意志に合わないところには貸さなかった。

「生命保険会社は、いっこうに死にそうもない健康な人を保険に入れて、保険料を取っている。われわれも倒れそうにない店と取り引きしておれば、保険会社のように確かな経営をすることができる」。これが良造の口癖だった。

勤倹の精神は合理主義の思想であり、ものを大事にする心である。良造は富貴への道の原動力として、勤倹力行を必須と考え、これを人物を評価するときの尺度とした。

実生活での倹約ぶりも徹底していた。三度の食事は一汁一菜。名塩さんでは、魚といえばアラしか買わないと、評判になるほどだった。風邪を引き鼻水を拭くときでも紙一枚といえども無駄にせず、最後まで使い切った。妻のセツもこれに同調し、縄の一切れ、一枚の広告ビラも

粗末にしなかった。

良造はよく人を諭した。人が理不尽な行動をし、または軽挙妄動するとき、あくまで相手の身になって冷静に判断し、過ちを犯すなと忠告した。ときにはお節介と見られるほど、執拗に説教することもあった。その際、良造は次のような諺や先人の言葉をよく引用した。

・士魂商才
・天倫汗の如し、禍は口より入りて口より出でる
・大志を抱く者、食を言わず
・大丈夫たる者、すべからく現代を達観すべし
・人の信の足らざるは、己の誠の足らざるなり
・人を相手にせず、天をあいてとせよ
・行すれば禄、その内に在り
・一銭に笑う者は、一銭に泣く

諭された人は、初めのうち心のなかで反発するが、やがてその言わんとするところをよく理解し、あらためて良造の精神の大きさを認識した。自らに厳しくしないで、人を諭せるものではない。良造の生活そのものが己に厳しいものであったから、他人もよくその言わんとするところを理解したのである。

良造直筆の書き付け

親苦労、子楽、孫乞食

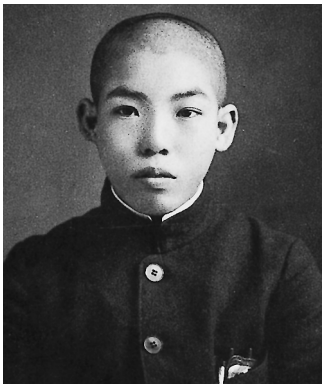
一人息子である小三郎への教育も、厳格そのものだった。箸の上げ下げ、茶碗の運び、食事中の目の位置から始まり、はたきやほうきの掛け方、雑巾の絞り方に至るまで、良造の厳しい目は小三郎から離れなかった。算盤を習うときでも、三回間違えると算盤が横面に飛んでくる。一言でも言い訳がましいことを口にすると、「親に口答えするのか」と怒鳴られ、少しでもふて

くされた態度を示そうものなら、手が飛び足が飛んだ。そのため、少年期の小三郎は、ひそかに反抗心を育てざるを得なかった。

良造は「親苦労、子楽、孫乞食」という言葉をよく口にした。親が苦労して営々と財産を築いても、子どもに満足な商人教育もせず楽をさせていては散財する一方となり、孫は乞食同然の生活をしなければならなくなるというのである。そのため、小三郎には小遣いは一銭も与えず、商家らしい贅沢な生活は一切させなかった。

小三郎は小学校を卒業すると、東京の名塩佐助のもとに預けられた。そこで雑用を手伝っているうち、小三郎はなぜあれだけ父親が厳しくしたのかを理解した。父に対する反抗心は消えたが、ちょうどその頃、小三郎はマルクス主義に出会う。商いに熱中する父の生き方に対する反発が、ふたたび心のなかに芽生えてきた。大正デモクラシーが謳歌され、自由な空気が満ちていた時代である。

心配した良造はせっかく入学したばかりの早稲田実業を退学させ、さらにその後に勤めていた並木製作所（現パイロット㈱）も辞めさせて、野付牛に呼び戻した。しかし、小三郎は置き手紙をして、ふたたび東京へ出奔してしまった。金儲けを罪悪視する息子に、良造はほとほと手を焼いたらしい。



東京時代の小三郎17歳（大正12年）

名塩一統の仕入れ旅

「現金仕入れ」と「製造元との直取引」という合理的な商法と、良造の気宇壮大な人柄によって、名塩商店は着実に発展した。野付牛が町制を施行した大正五年には、菓子類に限らず、缶詰、洋酒、食品雑貨へと、取扱商品の範囲を広げて行った。大正十二年ころには店員も増え、売上高も相当なものとなり、商売の基礎がほぼ固まった。

名塩の家屋は二階建てとなり、一階を店舗と事務所、荷造り場、二階を住居として使用、商

品の大半は上村運送店の倉庫に預かってもらっていた。

大正十二年から十三年にかけては、店員のなかから良造に鍛えられ、一人前の商人に成長し、続々と独立する者が出てきた。当時、「名塩の三羽烏」といわれた番頭格の木村格三郎、棚橋喜一郎、中飯伊平が、それぞれ帯広、名寄、大泊（樺太）に開業したのである。これにより名塩商店は一躍、道東、道北、樺太を地盤とする菓子問屋の一大勢力となった。また大正十四年には、良造の右腕として活躍した中村義美、後に帯広店を担当した今越文吉が入店している。

三人の独立は、名塩商店を本家とする、いまで言うチェーンストアのような形であり、伝統的な近江商人の経営方法を踏襲したものといっていい。近江商人の経営は、本家と出店を分離して独立採算制をとり、丁稚制度のなかで鍛えられた手代・番頭を経営に当たらせて、事業を発展させてきた。近代から現代へかけての有名商社には、近江商人の系譜を引くものが多い。

このころ人気を博していた菓子は、「今村の水無飴」「ボーロ」「生掛落花糖」「ピーナッツ」「洋菓子乾燥品」「祖父江キャラメル」「デセール」「松風」「落雁」「かりん糖」「りん種掛」「浪花のニッキ糖」「今西のアップル飴」などだった。

年に一度の仕入れ旅には、良造のほかに帯広、名寄、大泊の三番頭が随行した。道内はもとより、遠く京阪神方面のメーカーに直接出向く。その時の一行の姿といえば、着物に当時流行のインバネスといわれたマントを羽織り、信玄袋に角鞄をくくって振り分けにして肩にかつぐというものだった。

仕入れ旅は二月に行われることが多かった。この時期は菓子が売れず、原料も安い。そこを狙って、一年分の仕入れを格安で契約させられるので、道内外のメーカーは名塩一統の仕入れと聞けば恐れをなしたという。良造はこういう仕入れを、「私と取り引きしても無茶苦茶な儲けはさせないが、損は一文もかけていない」と、自慢した。

名塩商店の発展につれ、多くのメーカーはいっそうの取引拡大を狙って、良造を料亭に招待し接待しようとしたが、良造は「そんなことをする金があるなら、よい商品を一銭でも安く作

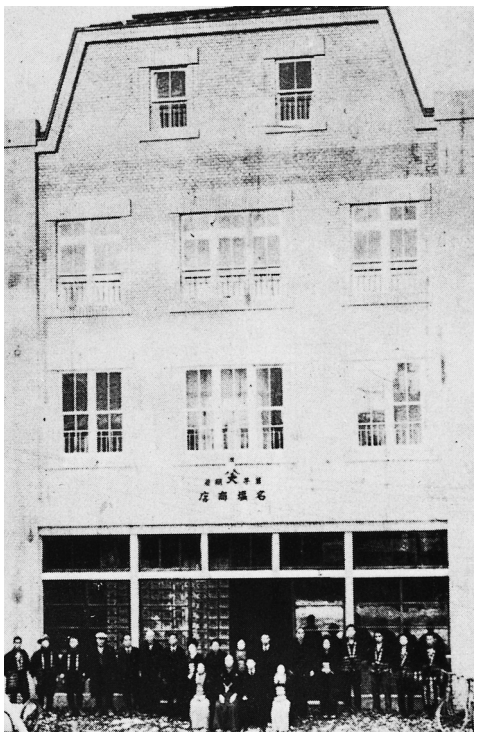
帯広出店当時の木村商店

ってくれ」と言って、辞退するのが常だった。

四階建て店舗を新築

昭和五年、野付牛は戸数四、三八一戸、人口二万三、五二六人の街へ大きく成長していた。商業の面でも、一段と有望なエリアとなった。ところが翌六年二月二十三日、隣家の北辰館から出火し、名塩商店の半分が焼けた。火は消し止めたが、水を被った荷が夜中にパチパチと音を立てて凍り、まるで木材が燃え盛るような音だったため、家人は恐ろしさに一晩中怯えたという。同年十一月、店舗を取り壊し、四階建ての店舗を新築した。

営業が発展し、店員も増えていたから、店舗拡張にはちょうどよい機会だったかもしれない。十一月三日から三夜にわたる新築披露宴を催し、道内各地から一〇〇人を超える人びとの祝賀を受けた。



四階建店舗
（昭和6年11月建築）

またこの年、小三郎が中飯智恵子と結婚し、翌七年一二月七日に現会長の良一郎が誕生した。結婚披露宴は三日にわたって行われ、全国各地の取引先から祝福を受けた。良一郎の誕生に際しても、各地から多くの祝いの品が届けられた。

良造は野付牛でも屈指の威容を誇る四階建ての店舗の完成に続き、二代目の結婚、三代目の誕生と、順風満帆の発展ぶりだった。孫を持つ身になったとはいえ、まだ四九歳の働き盛り。商売にも一段と熱が入った。

良一郎1歳の頃（昭和8年）

年賀の幹部社員とともに（昭和12年正月）

キャラメル商戦

昭和八年には荷動きが相当に増えてきたので、トラックをチャーターして配送の合理化を図った。また、事務量も増え、その日の営業状態の把握にも困るようになったため、小三郎は事務係を雇うように頼んだが、良造は聞いてくれない。このため、小三郎はナショナル会計機と伝票整理機三台を、八、〇〇〇円で購入した。昭和六年当時の内閣総理大臣の月給が八〇〇円、同十年にダットサン乗用車が一、六五〇円したというから、八、〇〇〇円という金額は思い切った投資額だった。良造は後でこれを知らされ、「せがれに任せたら、何千円もする会計機を入れたが、あんなものは何にもならない。まったく困ったものだ」と、よく人にこぼした。これは良造の古いといえば古い経営感覚が表れたエピソードといえる。

取扱商品では、昭和五年ころから「谷田のきび団子」や「新高バナナキャラメル」が人気を博し、大変な売れ行きとなった。新高製菓からは八年に「新高風船ガム」「ラクダキャラメル」、九年に「新高ドロップ」が発売された。また、このころから明治製菓がしだいに力をつけ、次々に人気商品を発売した。たとえば昭和十年に発売された赤い桜模様の「明治クリームキャラメル」である。明治製菓はこのキャラメルの販売に特に力を入れ、得意先を層雲峡温泉や温根湯温泉に招待するという戦術をとった。明治、森永、新高など大手メーカーが入り交じる形で、キャラメル商戦の口火が切って落とされたのである。

名塩商店はそのころ、銘柄商品についてはメーカーと一手販売契約を結び、地域独占販売をする方法をとっていた。森永製品は扱っていなかったが、不思議と特約品はよく売れ、販路の拡張にたいへん役立った。

このほか、当時取り扱った商品では、「りんだねもの」「らくがんもの」「きのこばん」「花付デセール」「いさご松風」「板松風」「ビスケット」、洋菓子、乾燥菓子では「バナナ」「フロット」

「ボーロ」「ストロベリー」「ゼリー」「小桜梅飴」「干ぶどう」「ヌガー」などがよく売れた。また、地方の商品では、松本、名古屋の「蓮巻」「うんぺいもの」「梅鉢」、仙台の「五かほ」「マコロン」、宇都宮の「かきもち」「あられ」、大阪の「しょうが餅」、埼玉の「さつまいも煎餅」「さつまいも納豆」などの人気が高かった。

店員たちは汽車に乗って、雨の日も風の日も雪の日も得意先を開拓して回る。その足跡は商圏の鉄道沿線にくまなく残された。

金持ち番付で西の横綱に

信用重視のひたむきな努力が実を結び、昭和十年から十三年にかけての時期に名塩商店は戦前の最盛期を迎えた。地元新聞にはしばしば野付牛町の金持番付が発表されたが、名塩良造は昭和二年に東前頭筆頭にランクされ、同十年には東の伊谷半次郎を向こうに回して西の横綱に昇進し、その地位を不動のものとした。

個人的にも親しかった伊谷半次郎は、やはり近江商人の流れで、呉服業を営んでいた。商工会議所、北見バス、一力無尽（今の北洋銀行）を設立し、北見市議会議長、北見市長を一七年間にわたって務め、全国市長会の副会長となり、名市長と謳われた。

商品の取扱量が年々増大するにつれ、上村運送店の倉庫から少しずつ運び込むのは手間がかかりすぎたので、四条通りに石蔵付用地四〇〇坪を買い、昭和十二年に第一倉庫を建設した。この倉庫は奥行三間半、間口一三間の大きさで、配送は大幅に効率化された。

しかしこのころには、軍靴の足音がすぐそこまで忍び寄っていた。

名塩商店4条側旧店舗

【第四章】 俳人呑空としての顔

上海、青島を視察

昭和二年に起きた金融恐慌に端を発して、日本経済は深刻な不況にあえいだ。農村は大凶作に苦しみ、街には失業者があふれた。世界的な金融大恐慌のなかで、各国は経済のブロック化に乗り出し、日本もまた昭和十二年の蘆溝橋事件を機に中国大陸への進出を企て、しだいに軍国主義の傾向を強めてゆく。

このような情勢下、良造は昭和十二年に、新高製菓の招待で中国に渡った。同社が軍の要請により着工した上海の製菓工場の見学を兼ねた中国視察だった。このとき、良造は生まれて初めて洋服を着、靴を履いたという。

良造は上海では小麦粉などの原料が北海道に比べて三割ほど安いのに、菓子の価格が変わらないことや、英国租界でキャンデーが日本の価格の二倍で売られていることをみて、「揚子江千里に拓けゆく強大なる販路を指呼の間にするこの上海に、製菓日本の躍進を期すことこそまこ

とに企業家の定石なり」と書いた。

同十四年にふたたび中国の土を踏み、上海から青島へ渡り、戦地の状況を生々しく視察した。良造はこの時、ドイツが去るときに残した壮麗な城跡を見て、「戦争は絶対に避けるべきもの、負けてはならないもの」と、痛感した。

統制令により廃業へ

昭和十三年に国家総動員法が発令され、経済統制がしだいに強化された。平和産業である菓子業界は真っ先にその影響を被り、名塩商店の事業も大きな転機に直面した。まず同十四年に四条通りの第一倉庫に続き、建坪六〇坪の第二倉庫を建設しようとしたところ、三〇坪以下に建築が制限され、棟上式の途中で工事中止命令が出されるという事件があった。また、このころから、砂糖や小麦粉をはじめとする菓子の原料が不足して、その生産・流通量が激減した。良造は東京、大阪を中心に、商品の仕入れに全力を挙げたが、時節が時節だけに思うようには行かなかった。このため、第二倉庫は結局、一度も使われることがなかった。

かねてから良造は、北海道の産業育成を願い、立地条件に優れている北海道の産業が本州に一歩も二歩も後れをとり、いつまでも北海道が従で、本州が主である製菓業界のあり方に大きな不満を抱いていた。物資不足のさなか、北海道で生産されたビートの外地輸出が始まった昭和十四年に、良造は「帝国菓子飴新聞」に、次のような文章を寄せている。

「この島もやっぱり砂糖がない、小麦粉が不足だ、菜種油、小豆、澱粉、晒しの並飴が値上がりした、木炭、米、酒がないと、内地並に騒いでいる。この悲鳴のさなかに、北糖ではビートを中国に輸出する許可が下り、釧路から青島へ三〇〇〇俵、次いで上海へ三〇〇〇俵輸出するという。菓子屋に勢力があれば、この砂糖を飢饉の悲鳴の中から、三万袋の中国行きを指をくわえていやせん。何とも気のもめる情勢であることよ。菓子屋の中から代議士の二、三人も

野付牛停車場（昭和15年頃）
〈北網圏北見文化センター提供〉

選出して、菓子屋の発言権を議会に行使すれば、原料屋の重囲を突破しうるのが、余りにわれらの仲間は無策であり、悲惨である」

菓子製造元における商品の生産は減少し、それさえも軍に優先的に回された。道内はもとより本州からの商品入荷もほとんど望めなくなり、店員も次々に退職して行った。ここに至り、名塩商店は販売業務を停止せざるを得なくなり、昭和十五年に統制令によって販売業務が停止され、事実上の廃業に追い込まれた。

昭和十六年十二月八日、日本軍の真珠湾攻撃により、太平洋戦争の火蓋が切られ、戦火は中国大陸から太平洋全域に拡大した。人も物もすべてが戦争のために動員され、産業統制により経済は戦時色を強めた。

昭和十七年、野付牛町が北見市となった年、良造は登別温泉街に居を構え、隠棲の日々を送った。中村義美夫妻は一足早く、北見市内に土地を取得して、満州向けの苗舗作りをしていた。同十八年の春には、小三郎も札幌に移り住んだ。

図書館の建物を寄贈する

昭和十七年、良造は北見を離れるに当たり、自分を大きく育ててくれたこの地の恩に報いるため、何をすべきか、日々自問自答していた。そうしたある日、新聞に掲載された、市会議員候補伊藤龍七の「北見に図書館を建設する」との選挙公約が目に止まった。一瞬のうちに、「図書館建設のために店を寄付しよう」と、心は決まった。

図書館建設に協力しようと決意したのは、良造自身のそれまでの血の滲むような人生体験から発したものだった。小学校一年で奉公に出された良造は、独学で字を覚え、新聞や雑誌を読みこなし、考える力を身につけて行った。そして、世の中の動きを的確に把握して商売を成功に導く一方、自らも文章を書き、業界を指導するまでになった。

「広い社会には、志がありながら、家が貧しくて学問のできない子弟がたくさんいる。自分は幸運にも、強い意志と旺盛な探求心により、自己の能力を自ら引き出し、社会に役立てることができた。しかし、自分のように辛酸の中から成功できる確率はまことに少ない。独学する子弟に、自分と同じような苦しい道を歩ませないためには、図書館の建設がぜひとも必要である。これが自分のできる社会への恩返しである。この寄付は私がするのではなく、社会が私にさせてくださるのだ」。良造はこのように考えて、伊藤氏を通じ、北見市に店舗を寄贈することを申し出た。

しかし、戦時中のこととて、なかなか開館できず、ようやく戦後の昭和二十一年八月になって、市立北見図書館が誕生した。蔵書一、五五三冊と規模は小さいが、道内では六番目の公立図書館だった。

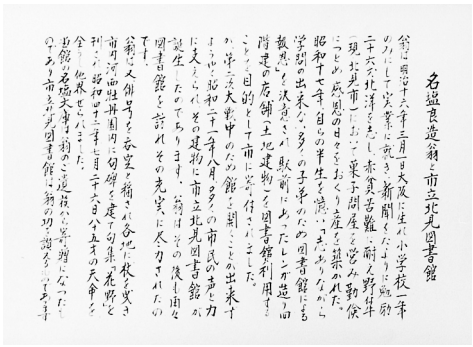
その後、昭和二十三年十一月に、北見市立図書館は、良造の寄付した四階建て店舗を売却して得た二六〇万円の資金をもって、市役所前の小公園の一角に新築された。戦後の殺伐とした社会風潮のなかで、この図書館は青少年の勉学の場だけではなく、市民の文化的な渇望をいやすオアシスともなった。

良造は図書館の建物を造っただけではなく、その運営方法についても、「図書館が社会に活用される度合いを高くするには、駅の待合室的な雰囲気をもたせるなど、これを利用しやすい体制をつくる必要がある。知識を一部特権階級のものとせず、大衆のものとしなければ、一世紀も遅れている国民性を救うことはできない。本を買えない人、本の必要性を知らない人を吸収する工夫が必要である」など、さまざまなアドバイスをした。

この功績によって、昭和二十六年十月十日、良造は日本図書館協会創立六〇周年記念式典において、功労者として表彰を受けた。いま北見図書館内には良造の胸像が据えられ、永くその徳を讃えている。

恥ずかしい私の履歴

北見市立図書館内に据えれている名塩良造の胸像や俳句
良造は日本図書協会創立60周年記念式典において功労者として表彰された



名塩良造翁と市立北見図書館

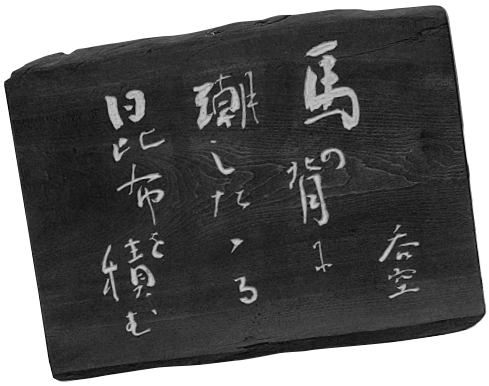
翁は明治十六年三月一日大阪に生れ小学校一年の頃にして家業に就き、新聞くばりに勤励、二十六年北海道へ渡し、赤貧苦難に耐え野付牛（現北見市）において菓子製造業を営み郵便局をはじめ成功の日々をおくり産を築かれた。昭和十七年自らの半生を顧み、まだ多くなかった学問の出来ない多くの子弟のための図書館にも振興をと決意され、駅前に大きなレンガ造りの洋建の店舗（土地建物）を図書館利用することを目的として市に寄付されました。

が第二次大戦中のため館を開くことの出来ずまもなく昭和二十一年八月多くの市民の声と力に支えられ、その建物に市立北見図書館が誕生、翁は初代館長に就任されました。

翁は図書館を設けその充実に尽力されたのであります。

翁は俳号を春空と称され、俳句を愛され、市内河西地区共同墓地に句碑を建て句集「花野」を刊行、昭和四十三年七月二十六日八十五才の天寿を全うされました。

翁の名塩夫妻の遺徳は、北見の地に生かされ、市立北見図書館に翁の功績を語り伝えます。



北見市立図書館

仕入れ旅の途上で作句

名塩良造は合理主義に徹した商人であると同時に、「呑空」の俳号を持つ文人でもあった。いつころから俳句を始めたのかは定かでないが、本格的に始めたのは野付牛駅前に店舗を構えてからだった。このころから、俳号をつけて本格的な作句を始め、店の二階で句会を開いている。こういうときでも良造は倹約を忘れることはなく、句会に使う短冊は新聞を送ってくる封筒をきれいに切り揃えたものだった。

道内各地で開かれる俳句会に、仲間を訪ねることもあったらしい。岩見沢で俳句会を開いていた産婦人科医の唐笠何蝶は、突然、呑空の訪問を受け、一夜を語り明かした。このとき野付牛の話を聞いて、後に移り住むことになった唐笠は、良造の思い出をこう書き残している。

「一日、岩見沢時代の陋屋を訪れた旅の俳人があった。和服の上にインバネス、信玄袋を式台に置き、飄々と玄関に立った。脱いだ下駄は桐ではあったが、いささか疲れていた。伴ってきた土地の俳人の紹介で、その俳号が呑空と聞いて、これはと、その顔を見たことであるが、顎に多少黒味のある白髭を山羊の如く下げ、小さい眼をもっともらしくしばたたかせていた。私は、その年齢から見ても、服装から見ても、どうしても、どこかの末寺の住職か、村社の神主さんかなと思ったことであった。（……）

歩き好きの氏は、早朝に家を出て、市内の知人（主に俳友）をひと通り訪問することが日課であったが、私の家人は病院の昼休みのひと時を窺って、奥座敷の柱に凭れ座り、私を待っていたものだ。気が向くと一日に三回も四回も見えた。氏の句帖は掌に入るような小さなものであったが、それを塗りつぶすように細々細々と来る日も来る日も、たくさんな句が書き加えられていた。人の句を見るのは決して嫌いではない私ではあったが、毎日のように二〇句も三〇句も同じような句を見せられ、それになんらかの言葉を添えなければならないのは、いささか

唐笠何蝶

辟易したものであった。すでに心を許し合っておったので、医業に疲れた私は、よく呑空氏の膝の前で、氏の話を夢うつつとなく聞きながら、前後不覚の眠りに落ちたものだ。そのようなときには、恐縮する家内を制して『奥さん、起こさないで』と言いながら、隙間風のように去って行った」

良造は戦後しばらくの間、俳友の水野波陣洞と各地を回って句を作るという、悠々自適の生活を送っていた。このころに良造は呑空として、もっとものびのびと生きたと言っていい。昭和二十三年には、北見の俳友の唐笠何蝶、吉岡秋帆影らと、俳句誌「阿寒」を創刊した。そのとき呑空が寄せた一文には、次のように書かれている。

「宗教と風流二にして一の源泉なり。俳句とは仏性の声にして一句能く自己を拓き他を排して、春風颱蕩の和を四輪に霑すものである。斯かる真諦を志すの子女は吾等の『阿寒』に投じ来たりて、六根清浄の登山の杖を力に向上の山嶺を目指すべし」

これを見てもわかるように、商人名塩良造と俳人呑空の接点は、仏教への帰依にあった。また「阿寒」は、正岡子規が主宰した「ホトトギス」の影響が強く、写生を重んじた。

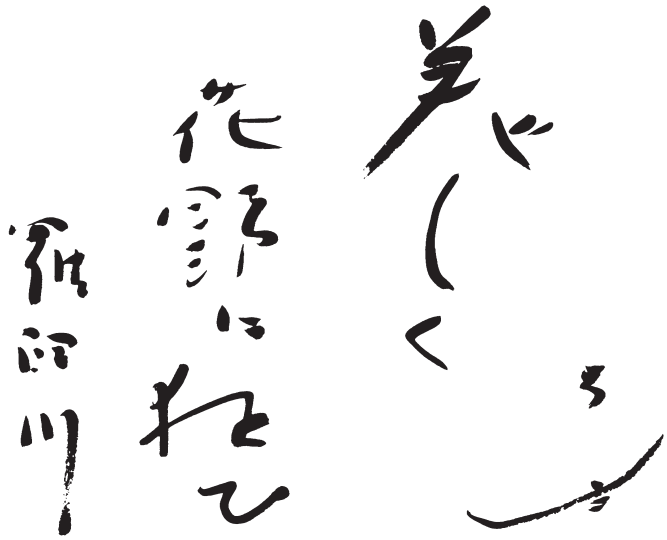
呑空の俳句への情熱は、高齢で病に伏すまで枯れることはなかった。呑空の句は仕入れ旅の途上で、次々に生まれた。その足跡は、南は四国、九州、北は樺太まで及んでいる。青森の癩病患者の保養園に寄り、俳句の指導をしたこともあった。句は列島各地の風物を詠んでいるが、秀句とされているものには北海道の自然を題材にしたものが多い。数多くの作品のなかでも、

美しく花野に狂ひ羅臼川

の句は、秀作として知られている。花野は秋の季語で、千草が咲き乱れる小清水原野を羅臼川が大きくうねって流れる様を詠んだ。華やかな秋の情景のなかにも、「狂ひ」という言葉から一抹の寂しさが漂ってくる。昭和三十三年に、この句碑が北見市内の河西牡丹園の一角に建立された（昭和六十年に北海学園北見大学の構内に移設）。碑には呑空ののびやかな筆跡が刻まれている。

俳句誌「阿寒」

また、死の前年の昭和四十四年には、俳友の手により呑空の句集『花野』が刊行された。



句碑除幕式での良造夫妻

句碑除幕式での小三郎夫妻

名塩呑空翁句碑除幕式　河西牡丹園
（昭和32年8月18日）

【第五章】名塩復活への布石

再興へ踏み出す

昭和十五年の統制令により、廃業を余儀なくされていた問屋業も、戦後しばらくして各種の統制が解除されるにつれ、復興の兆しを見せた。製菓業では、昭和二十四年十一月にまず水飴の統制が解除され、菓子飴類の自由販売が許可された。これを契機に、全国に菓子飴製造業者が急増した。国民は長い間、甘いものに飢えており、爆発的な需要を引き起こしたのである。このころはキャラメルメーカーだけでも、全国で二一八社を数えた。

菓子類の生産は輸入糖の業務配給を受け、昭和二十五年四月に再開され、同二十七年に待望の砂糖と小麦粉の統制撤廃が実現し、完全な自由競争の時代に入った。

終戦の年、良造はすでに還暦を過ぎ、六二歳に達していた。戦後しばらくの間、商売の再開に何の動きも見せなかった。名塩の灯は、農地解放後、甥の中村義美がアイスキャンデーの製造と菓子配給を通じて細々と守っていたが、本格的に再開するかしないか、あるいは再開でき

戦後の北見市1条通り
〈北網圏北見文化センター提供〉

るかどうか、数年の煩悶があった。

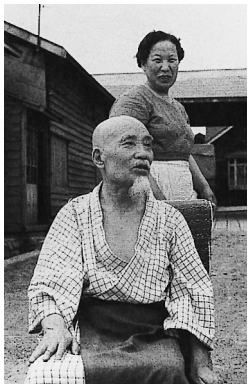
まず、四条通りの家屋と倉庫は、市内の菓子製造組合の製菓工場として貸してあったが、なかなか返してもらえない。それに何よりも、資金がなかった。戦前と通貨の価値がまったく異なってしまっていたのである。現金仕入れ主義の良造に現金が不足していては、手も足も出ない。資金がなければ銀行から借り、手形を操作しなければならないが、良造の不安はまさにこの一点にあった。

また、戦前と戦後では、問屋とメーカーの立場が逆転していた。戦後の物不足の時代は、ものを作りさえすれば何でも売れたから、メーカーは強気になる。現金買いで安く仕入れるという良造の手法も通用しなくなっていたのである。

戦後、正しい暖簾をもつ問屋は少なくなっていた。しかし、過去の「名塩」の暖簾の重みは、そう簡単に消え去るものではない。幸い、良造が商売を再開するなら援助しようというメーカーがたくさん現れてきた。これに気を強くした良造は、手持ちのわずかな現金と登別の住宅を売却して得た合計一〇〇万円の資金を元手に、北見市四条西二丁目に「株式会社名塩商店」を設立し、中村義美とともに再興への第一歩を踏み出した。昭和二十五年十二月のことである。

社運をかけた仕入れ旅

多くの困難を覚悟しての再出発であっただけに、良造は店の再開後、老体に鞭打ち、悲壮な決意で東奔西走した。いちばん苦労したのは、やはり資金の調達だった。戦前は安田銀行一本やりだったが、戦後、安田銀行が富士銀行に代わると、昔からの懇意というものが通用しなくなった。複数の銀行と取り引きする必要性を痛感した良造は、再開当初、朝から拓殖銀行に出かけ、夜は夜で支店長の自宅を直接訪問して、融資を懇請した。戦前の最盛期には、安田銀行以外からの取引要請を退けていた良造も、いまは頭を低くして取引を頼まなければならない。



良造とセツ（昭和26年頃）

時代が変わったことを、良造は悟った。

昭和二十六年四月、良造は戦後最初の仕入れ旅に出た。この仕入れ旅は、札幌を振り出しに青森、宇都宮、東京、湯河原、豊橋、名古屋、岐阜、京都、大阪、長岡、函館、小樽を回って、約一カ月に及んだ。二十六年といえば、治安が大分落ち着いたとはいえ、堅い椅子の夜汽車を乗り継ぎながらの長期旅行は、老人にとって大変な重労働だったにちがいない。

こうした再開直後の苦しい時期に、戦前に懇意にしていた多くのメーカーが協力してくれた。函館の道産製菓が、戦前に同社の創業を前払金を払って援助したお返しとして、必要なだけの商品を無条件で納入してくれたのをはじめ、他の製造元からも援助・協力の申し出があった。こうした好意がいかに良造を元気づけ、商売の再開の支えとなったか、計り知れないものがある。

東京名塩会の結成

昭和三十年代は、華々しい「神武景気」で幕を開けた。同三十一年度の経済白書は「もはや戦後ではない」と、戦後経済復興を高らかに宣言している。国民の所得水準はしだいに向上し、テレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機などの電気製品が、急速に普及した。菓子の需要も急増し、キャラメルのほかチョコレートやビスケット類の増産が進み、新たな発展期を迎えた。

良造はこの機をとらえ、ふたたび「現金仕入れ」の金看板を掲げて積極経営に乗り出し、東京仕入れ部を開設し、小三郎を東京での取引先の開拓に当たらせた。戦前、良造は仕入れ旅に出て商談をすませると、店主や工場の若い人びとに菓子メーカーのあり方についてよく説教をしたが、戦後はこれらの人びとが工場主や菓子組合の幹部になっていた。小三郎が訪問すると、良造に恩義を感じ、懐かしがる人が多く、各所で良造の思い出話に花が咲いた。そして、名塩商店の復興のために一肌脱ごうと買って出て、自らが取引先になったり、あるいは信用できる

数多くのメーカーを紹介してくれた。このとき小三郎は、世の中は巡り合わせであることを再認識し、父が繰り返す「報恩」という言葉をよく理解できた。

こうして取引先の開拓は順調に進み、昭和三十二年四月に新高製菓、佐久間製菓をはじめ主要な現金取引先三〇社からなる「東京名塩会」の結成をみた。この東京名塩会は、名塩商店と各メーカー、あるいはメーカー間の親睦と情報交換の場であり、戦後の新しい事業環境の下で、各社が発展していくための精神的な拠り所となった。翌三十三年には創業五〇周年記念事業として、名塩会を中心とする古い仕入れ先を北見に招待した。

また、この間、良造は松本市が良質な菓子の産地であることに着目し、戦前からの取引先であるアルプス製菓百瀬隆義社長の協力により、「松本菓子移出入組合」の設立を提唱し、自ら主導的な役割を果たした。そして、同組合の製品を一括現金仕入れすることにより、製販直結の仕入れルートを確立した。このようにして、名塩復活への布石は着々と打たれていった。

病に倒れる

孫の良一郎は、昭和三十年に北海学園大学を卒業して、森永商事に入社した。いずれは家業を継ぐことになっていたが、一度は中央に出て一流メーカーの空気を吸って、自分の能力に挑戦した方がいいという、父小三郎のアドバイスによるものだった。良一郎は天性の明るさと行動力で、抜群の営業成績を残し、多くの友人に恵まれた。

昭和三十三年六月、良一郎は良造の親友で東京・日暮里で製菓業を営む永野善四郎夫妻の媒酌により、森永商事営業部次長・鶴見知進の次女・都と結婚した。北見市長以下、地元政財界関係者、主要取引先など多数を留辺蕊の温根湯ホテルに招待し、盛大な披露宴を催した。披露宴の席上、良造は挨拶に立ち、自らの過去を振り返りつつ、人の好意がいかにありがたかったかを、それに懸命に報いようとする心がその後の商売成功の原因となったことを話し、良一郎

東京名塩会の招待者を会社案内する良造（昭和32年8月）

へのはなむけの言葉とした。良一郎は「人の恩に報いよ」という祖父の言葉を、いまもナシオの行動指針の基本としている。

名塩商店の経営が勢いよく上昇しはじめ昭和三十四年、戦後の無理がたたったのか、良造は病床に倒れた。若いころの行商で鍛えたさしもの健脚も、思うように動かなくなっていた。翌三十五年三月一日、病床の良造を囲んで喜寿の祝宴が開かれた。このとき、俳句の愛弟子、吉岡秋帆影の肩にすがって床から起き、立ったまま「寿」の一字を勢いよく書いたが、俳号「呑空」の二字はついに書くことができなかった。

良一郎は昭和三十四年に森永商事を退職し、常務取締役として名塩商店に入社した。すでに良造は病に臥しがちだったので、祖父に代わり家業の発展に力を注ぐこととなったのである。

死去

良造が病に倒れて以後、八年間にわたって妻セツと孫嫁・都の献身的な看護が続いた。しかし、さすがの良造も寄る年波には勝てず、多くの人びとの祈りも空しく、昭和四十二年七月二十六日、永遠の眠りについた。享年八五歳だった。

八月六日、北見市の本覚寺において、しめやかに社葬が執り行なわれた。良造死去の悲報に、良造を愛し尊敬した人びと、有縁の人が全国から驚くほど集まり、市民あげての弔問客で本堂は埋めつくされた。翌七日、小三郎と良一郎が宇佐美北見市長を訪れ、香典返しの意味で、北見市立図書館の図書購入費として一〇〇万円を寄贈した。

良造は、社会への貢献が認められ、紺綬褒章三回、内閣表彰を四回受けた。良造の社会に報いるという姿勢は、今日に至る株式会社ナシオの経営の根幹をなしている。今後とも会社ある限り、この社風は受け継がれていくことだろう。

正月出荷風景（昭和28年）

北見市一〇〇周年で教育文化功労者として特別表彰を受ける（平成9年）

名塩良造の遺訓を受けた名塩の文化的な社会への貢献は社風として受け継がれている

名塩良造の葬儀
北見・本覚寺での社葬には、全国から多数の人たちが本堂を埋め尽くした
（昭和42年8月6日）

北見開基100年記念式典にて株式会社ナシオが
教育文化功労特別表彰を受ける

《付記》

この伝記を刊行するに当たり、ルーツを探していたところ、私と同じく札幌東ロータリークラブに在籍の北海道医師会会長・吉田信先生の父君が、医師のかたわら和紙の研究家として多くの資料を持たれていることがわかった。そのなかに、西宮市、名塩の教行寺先々代住職・中山琇静師が、名塩紙の沿革から現紙見本を含めて生産・販売について記録した本があることがあった。それをご恵贈くださったのを機会に、西宮市、有馬温泉と宝塚の間にある名塩の教行寺（創建一四四七年、本願寺八代蓮如上人による）住職・中山沃先生をお訪ねしたところ、先生は岡山大学医学部名誉教授であり、医学会などで吉田先生ともご面識があることが判明した（御実兄が日本医史学会理事長）。また、吉田先生は札幌で開かれた全国大会の時の委員長でもあった。そのご縁で、中山先生は「西宮市史」「大阪紙業沿革史」などを調べてくださり、江戸時代、名塩紙扱大阪紙問屋五二軒の名簿から、良造の父・幸三郎の養子先、名塩屋佐助の名前を探し当ててくださった。さらに、明治十八年、大阪天満宮に大金燈篭を組合として奉献した中に、名塩佐助の名があることも現地で見て確認してくださった。

ご親切にはお礼の申し上げようがない。

また、創業時のエピソードは、『創業六十年史』の中で二代目小三郎が書き綴ったものと、『北見市図書館三十周年史』（昭和52年発行）で良造が語り残したものの中から抜粋したものです。

俳人 名塩呑空

花野秀句集

鷹日和

◆昭和元年〜昭和20年

くつきりと樽前晴るる鷹日和

夏海やこむらさきなる利尻富士

向日葵や道の下なる造船場

風鈴の下へお膳を運ばるる

夕焼けや山の上なる麦の秋

客あらば炊く湯の宿や冴え返る

静けさや時雨となりし銀閣寺

時雨ゐて大文字山見えてをり

摩周湖の霧やまひ翔つ鳶日和

遠足の列沈みゆく花すすき

虫すずし恵庭の裾の一軒家

控訴院の裏に友をり雪をふむ

索道の五里の雪渓靄を越ゆ

夏草に没してロシヤ監視兵

ロッペンの玉子累々秋日和

天葬の夏木を鳥の離れたる

一枚の磐石白き瀑布かな

有珠の名月

◆昭和21年～昭和23年

虫の夜の有珠のゆさぶる湯治かな

飢饉くる覚悟の蕗を漬けて置く

客橇に花咲き蟹の生きてをり

千島見ゆ日を懐かしむ鱈場かな

秋天に有珠の怒りの美しく

蟹売に米渡しをり湯治人

花疲れ明王の威を憚からず

日永人今良寛の名を得つつ

霧島の白が咲きつぎ金揚羽

露天風呂ここら一面ねぢあやめ

噴泥に山の生るる有珠の秋

時雨をも冒して茸とりに妻

風花や瞰下す浦の烏賊干して

湯の宿の灯のとどきゐる雪の橋

鴨の浮きオホツクの春遅々として

粟干して石狩番屋鮭を待つ

物を負い孫うけとりの暮の旅

古平や寺々までも鰊干し

石幾つ置きて炉が成り天幕張る

炉に膝を割り老い呆けの寝息かな

襟裳岬紺に一発鯨船

カルルスに虚子杖を立て朴の花

奥津城の穴の出入りの蟻多き

昆布積む

◆昭和24年～昭和25年

ニセコの灯見えての橇のはかどらず

知床の花野の狐昼も出て

祭らるる熊の昂ぶり花矢降り

羊蹄の天有珠の天花ぐもり

羅臼富士雷雨の後の月捉へ

湯女の来て雪割る者の耳へ口

深山蝶来りて舞ふや岩魚焼き

山女魚釣り夜盗の如く出てゆきし

熊の皮敷いてとばくの山帳場

羆の子綱のかぎりを往き戻り

万象の娑婆の美しく松の内

馬車の旅四五里にわたる麒麟草

利尻野の笹生に育ち馬肥ゆる

夢つつむ船

◆昭和26年～昭和29年

角巻に夢をつつみて船を待つ

冬凪や雪一文字の宗谷岬

さるをがせにも絲つらら猟のみち

野を拓く炎の上を蛇の飛ぶ

人喰ひし熊さらしあり役場前

知床の花に青鱒のぼりそめ

なつかしや西日に尖り恐山

鮎の奥美濃

◆昭和28年～昭和29年

奥美濃の短冊問屋鮎を干し

鮎を干し柿を干しもし紙漉ける

二階まで草いきれとも湯の香とも

湯女の寝てゐて甲虫匍つてゐる

颱風の竹美しく狂ひけり

春烏賊の肴にひとり旅に酌む

羅の舞子の帯にふるるなし

化粧する妻の姿をすだれ越し

麦秋の黄の平らなり伊吹山

三笠山ドライブ道の花馬酔木

湯けむりのゆききの坂の蕗の薹

山荘を温泉けむりおおう若葉風

みちのくの旅明易くほととぎす

湯女の化粧

◆昭和30年〜昭和31年

姿見をとりまく湯女ら初化粧

湯女やさし妻のごとくに炭をつぐ

左右から曳かれ若芝柔かく

むらさきのリラの落花を蝦蟇のとぶ

白鳥の翔つ氷原の利尻富士

熱燗に膝をぬらせる湯女若く

梅の花かかげ土佐路の木賃宿

有明の初夏の潮の走るなり

大小の湖

◆昭和32年～昭和33年

眼にうすく白鳥の天仰ぎつつ

駅長がタイムありと言ひ花野駅

はまなすと百合咲く駅に降ろされし

山羊の佇つ花野ざくざく砂の音

木魚の音遠からず夕の風は秋

恋いて来し十勝野の秋むらさきに

十勝訪ふこと最後とも秋を知る

らんまんの花を見るごと銀ポプラ

雪止めの足場丸太に陽炎える

寒林にふれもして飛ぶ四十雀

積雪の水その雪に生れたる

武華川の氷の底の水を汲む

名塩良造伝

株式会社ナシオ創業者

名塩良造

一九九八年〈平成十〉七月三十日発行
発行◆株式会社ナシオ
札幌市西区八軒九条西一〇丁目四四八
印刷◆株式会社アイワード
装幀◆クライ・アント